



中村俊定文庫
文庫 18
862



天保十二年刊

九起跋



梅林茶談

梅室素信撰

九起著

○色蕉翁と云く俳諧は古人かや看破して一語を
與ふあやういふまゝの流俗海内は満ちてゐる
そらかりしうらやうを蕉門は俳諧の味海を
しつゝ以て俳諧を以てしつゝ文辞をもつてつゝ俳諧を
とて俳諧を以てしつゝ俳諧を以てしつゝ俳諧を

造る蕉の庵丁う半をぬふ多し一數十年乃ち習練を
つゝ後世に傳へし俳諧を以てしつゝ俳諧を以てしつゝ
かゝる世に俳諧を以てしつゝ俳諧を以てしつゝ俳諧を
物人情世を以てしつゝ俳諧を以てしつゝ俳諧を
習練を以てしつゝ俳諧を以てしつゝ俳諧を以てしつゝ
とて一すらすらとつゝ俳諧を以てしつゝ俳諧を以てしつゝ
俳諧を以てしつゝ俳諧を以てしつゝ俳諧を以てしつゝ
杉骨碎身しつゝ俳諧を以てしつゝ俳諧を以てしつゝ
文をかり又論語乃并老小学而時習之亦不説乎
とてしつゝ俳諧を以てしつゝ俳諧を以てしつゝ俳諧を

かり昔余の支小筆道執心乃人あり之而...
 けり古法帖は佳品をいつめ筆をならせ書と多く
 一と師はいつきと筆を論す半筆なるふ
 そと筆急と云りうけし書一と云ん書一いつ
 かりは則とて結縛とて紙をすおふわさす涑
 あろの故をうと御士とてはたおれ、ゆるり又つら
 けりつらまうと書り画難坊とつるまおあう古
 けり多画もせとをけり能画をともしりてり
 書りついと難きをとりつと云らうとけりめとつらりや
 かん多難きをとりつと云らうとけりめとつらりや

き類乃位地なきも多しと書りてりつらり筆をとり
 たらまうと平も画と筆一とつらりてりつらり筆をとり
 〇今や速疾をとり之地乃御道たつりつらりてり

今も多制乃狹害なるをとりて其車乃いさつらり
 かりつらりたふ御白あつらりて筆をす書りて書りつらり
 をいつらり

〇今乃筆をとり神紙籍をとりおらりて書りて書りて

筆のつらりてり

新良ねくくふ無一作乃面
つふさくやと柱楸鬼よむ僧

又

年一乃詠くくふま乃文々々々
くくくくく 鮭乃魚といくま
わく新のくくくくくくくく
新 号

又

くく年一乃如房乃親子乃まま
又くくくくくくくくくく人
は即一乃何故くくくくくく
新 号

又

くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
山伏はくくくくくくく
新 号

又 釋教二のま

袈より經くくくくくく
つくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
子白くくくくくく
新 号

又

C
上
河原崎より乃木綿之川なり 糸泉
源一やと遠くを来り川乃端 中
乃々々々々々やうやうの月 糸
杖守り女車乃盤をよみ 車細
神そあまの宮を峨乃は編 釣雪
右五乃乃内親者二乃新紙一乃
一乃二乃乃河原山嶮と我乃は編
つり
口月数字舟おれと婦乃乃其門之乃乃婦乃乃乃
一 報乃乃乃乃 氣紫 侍 嵐雪

一 是れ連敷をよむは乃乃 湯子

又

河原崎より乃木綿之川なり 糸泉
源一やと遠くを来り川乃端 中
乃々々々々々やうやうの月 糸
杖守り女車乃盤をよみ 車細
神そあまの宮を峨乃は編 釣雪
右五乃乃内親者二乃新紙一乃
一 報乃乃乃乃 氣紫 侍 嵐雪

又

河原崎より乃木綿之川なり 糸泉
源一やと遠くを来り川乃端 中
乃々々々々々やうやうの月 糸
杖守り女車乃盤をよみ 車細
神そあまの宮を峨乃は編 釣雪
右五乃乃内親者二乃新紙一乃
一 報乃乃乃乃 氣紫 侍 嵐雪

又

北の山に一羽居る鳥

狐屋

終まりり日用おの具

全

月乃かゝる 四角北門

角

又

おのけのやを 望みたり子の人

沽圃

おのけのやを 望みたり子の人

里圃

悔しきこと 一歩のこゝ換あひ

馬草

又

と味線かゝる 子枝の草人

重五

あきつゝ 美濃のやを 望みたり

あ

あきつゝ 美濃のやを 望みたり

杜ふ

又

六位よりあゝ 一息のこゝ

六

代よりあゝ 一息のこゝ

全

あきつゝ 美濃のやを 望みたり

あ

又

あきつゝ 美濃のやを 望みたり

あ

あきつゝ 美濃のやを 望みたり

あ

あきつゝ 美濃のやを 望みたり

全

又

約束り小名をひききりき

馬寛

十里をゆりけき出かり

里圃

又

綱をよびきりひり

一花をよびきり山ゆき

舟りきり味世の記をわく

雨双をよびきり富をよびきり

ちりおめ共角をよびきり十六人

かり四りり四ねり

又數字の自續

六り一谷をよびきり山幸

廿

七十小をよびきり助技

翁

之又通り裏り

廿

○同 数字の自續 又數字の自續

七り一谷をよびきり山幸

翁

七はけり

廿

又

又

さへ〜「キ」をうらむ〜なり
 曲〜つ〜け〜と鳴や〜ん
 か〜〜〜る〜を〜め〜

瑤 頌
 正 秀
 瑤 頌

又

あ〜日〜と〜と〜か〜を
 夏〜り〜り〜と羽織〜着て
 あ〜〜〜の市〜懐いあ〜と
 柳つ〜と〜や〜人〜ら〜あ〜あ
 柏木〜の柳〜の〜け〜つ〜

越 人
 中 水
 越 人
 中 水

又

あ〜り〜ら〜ら〜あ〜ら〜ら〜
 な〜ら〜ら〜ら〜山〜ら〜
 あ〜〜〜月〜〜〜の〜あ〜

越 人
 傘 下
 全

又

紀念〜と〜休〜ら〜ま〜の〜と〜と〜や
 多〜〜〜古〜〜〜星〜ら〜杖〜
 津〜ら〜み〜あ〜〜と〜あ〜て

岩 雪
 溜 子
 岩

又

尋紙〜あ〜い〜〜〜け〜か〜み〜
 待〜し〜や〜す〜と〜や〜あ〜さ〜く〜あ〜

半 残
 土 芳

三月廿五日 侍下連乃とありて 翁

又

ふ〜〜の 燈管よけの 貝の壳 猿 帷

い〜の 鐘乃 侍〜く 乃さ 燈 帷 然

〜〜〜と 花乃 侍〜は 大手先 望 翠

○同月並日 並よ 乃乃 月見を 燈よ 燈乃 乃〜〜

燈とす 乃乃

之 歌 ありて 乃乃 卯月 廿乃 未 翁

お 宿と 總 乃乃 五 亥 未の 町 支 考

際乃 日 初乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 性 然

又

新 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

又

乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

又

おろし廿日とやさき 麦の粉 羽生
一おろし 家から 何さかたや 中
あし 裏から 新きききききの目 旦

又

明日を 故より 首おろし 重五
小と 大より 意とを 一つとを 翁
自ら 述より 牡丹笠人 杜公

又

夕月乃 入像子と 塘きい 篇
たそと 卿を つと ひと 村 一井

望みより 確と 二三日 長江

○不のぬ 弁おろしを 寝ふらふと 葵のたより 意心
晴らすと 終

ききききも 果の 伸 垢つく 菰子
種たより 垢より 古の 結句 怪然
道と ひとと ぬ月乃 終さ 元代

又

擬 乃 角の とろとぬ 中 宛 馬 葛
傍 出 乃 半 小 俵 とろとぬ 翁
かたぬ 晴らすと 隠す 肉 終 估 團

又

昔かゝの髪は人々の羨むる
昔山

又かゝの髪は人々の羨むる
昔雪

又かゝの髪は人々の羨むる
濁子

又

上張を縫ふぬ程は
結糸

そつと眠るを酒は
利半

あふり泣くを
翁

○ま世は白き雲をけし
新島集がうたを
昔かゝの髪は人々の羨むる

花のうらみは
井徑

さへ花のうらみは
二唄

又

あふり泣くを
聖水

あふり泣くを
羽衣

又

花のうらみは
傘下

着る花のうらみは
越人

又

花のうらみは
落悟

と雨のうらみかきよしはま 廿九

又

何れや海舟のたけきり 配力

あはれしきりぬきの終 子考

又

毎日ゆつたえのまじりけりて 性世

日曜りなきしきりる夜 廿四

○ 雪と月とちとち候候

あはれしきりぬきの終 院室

とくしきりぬきの終 実産

浦舟をゆつた候候 又云

又

あはれしきりぬきの終 暮梧

柳らぬきりぬきの終 廿九

新なる月とち候候 廿九

○ 月とち候候のち候候

○ 月とち候候のち候候

殺引りぬきりぬきの終 元兆

あはれしきりぬきの終 史郎

あはれしきりぬきの終 廿九

又

こゝ木舟の月乃懸杖 凡北

昔のこゝ花のこゝ山舟 菊

いゝこゝこゝの夜立 去来

又

新雪のこゝ舟乃新 菊

後夜虫のこゝあき 夕市

いゝこゝ月乃凌 芥ト

又

日东村の白く傍の月を又て 重五

中よりおぼろのこゝは色は 菊兮

よの露とつゆのこゝは 菊

又

海舟のこゝ舟乃舟 杜國

いゝこゝの舟乃舟 中水

月より舟乃舟の舟 菊兮

又

海舟のこゝ舟乃舟 菊

舟のこゝ舟乃舟 全

舟のこゝ舟乃舟 新人

着る居るを在る行をうき 利生
そのたうあまう ちけの 娼身 娼女
六十七の 娼身 体なりけりわらうら 娼女
あまの 娼身 体なりけり

又

新の 本 ち ち ち ち ち ち 史 印
ち ち ち ち ち ち 結 團
井 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
六 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
あ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

物 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
速 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

後陽成帝御瘡乃ち、行侍乃速く

宗 紙
宗 長
基 補

制 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
制 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

○太乃 勅使をてて去人乃見 裕を志し、て時多
制乃 娼身をてて去人乃見 裕を志し、て時多

○
河津の寺願と云ふ。昔も昔の邦の民の心を
と樹けぬ。湯水の東にふ。ちと。な。ん。の。縮。こ
こ。お。と。伸。こ。と。を。ゆ。り。う。あ。ら。う。は。り。多。制。の
と。つ。ひ。な。ら。し。

○今時をいつく。年月を數なると。こゝと。可。難。と
は。い。ふ。り。う。い。ふ。り。な。ら。ば。一。考。を。探。る。ま。は。佳。白
あ。ら。わ。い。の。つ。と。も。こ。合。ら。し。む。と。も。な。り。舞。う。
思。ひ。も。も。こ。合。ふ。な。ら。む。け。く。又。一。考。の。何。う。
合。な。し。む。し。ち。と。な。網。の。と。り。舞。う。も。亦。り。り。上
拙。さ。味。ら。ば。涼。く。物。ら。う。サ。と。こ。合。と。く。あ。ら。む。

仕。の。な。ら。ま。の。あ。ら。わ。い。の。つ。と。も。な。り。舞。う。か。
○今今より廿年より昔。さう。あ。つ。い。ふ。と。自。ら。ら
点。若。ら。う。の。十。餘。人。あ。つ。い。ふ。は。り。結。中。あ。ら。む。
あ。つ。い。ふ。は。り。の。ゆ。り。し。と。な。ら。し。む。あ。ら。う。か。の。あ。ら。む。
あ。つ。い。ふ。は。り。の。ゆ。り。し。と。な。ら。し。む。あ。ら。う。か。の。あ。ら。む。
あ。つ。い。ふ。は。り。の。ゆ。り。し。と。な。ら。し。む。あ。ら。う。か。の。あ。ら。む。
あ。つ。い。ふ。は。り。の。ゆ。り。し。と。な。ら。し。む。あ。ら。う。か。の。あ。ら。む。
あ。つ。い。ふ。は。り。の。ゆ。り。し。と。な。ら。し。む。あ。ら。う。か。の。あ。ら。む。
あ。つ。い。ふ。は。り。の。ゆ。り。し。と。な。ら。し。む。あ。ら。う。か。の。あ。ら。む。
あ。つ。い。ふ。は。り。の。ゆ。り。し。と。な。ら。し。む。あ。ら。う。か。の。あ。ら。む。
あ。つ。い。ふ。は。り。の。ゆ。り。し。と。な。ら。し。む。あ。ら。う。か。の。あ。ら。む。
あ。つ。い。ふ。は。り。の。ゆ。り。し。と。な。ら。し。む。あ。ら。う。か。の。あ。ら。む。

○ 貴殿の御事なむとて心く

○ 申はうとてはちと秘書なる佐士あり
必終よきとあはれはちりあはれあはれ
はちう口よりあはれとて各年終り
あはれなるはちとていふ人として
申はうと名利の佐士とてはちとて
事とてはちとて小神とてはちとて
はちとてあはれなるはちとて甲斐なるはちとて
はちとて老より美言以可市とてはちとて
傳へ人としてはちとてあはれなるはちとて

○ 秘書なるはちとてはちとて

名利の佐士とてはちとてはちとて
事とてはちとてはちとてはちとて
はちとてはちとてはちとてはちとて
はちとてはちとてはちとてはちとて

○ 秘書なるはちとてはちとてはちとて
はちとてはちとてはちとてはちとて
はちとてはちとてはちとてはちとて
はちとてはちとてはちとてはちとて
はちとてはちとてはちとてはちとて

〜〜〜
か〜後〜

○を母自他もよあ島はし〜
海はよあ〜
〜直徳直室の國〜
後と信は家國家とい〜
り酒と〜
年乃あ〜
〜九十年〜
〜

も後〜

○を母乃乃青縁信〜
北〜
一〜
○を母〜
ら〜
外學乃便〜

直乃あ鶏の〜
け松の〜

よきと申すあぢの雨降る 出水

卯酉の雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

まつと祝ふと 酒のあぢ 利牛

小南の雨降るあぢの雨降る

雨降るあぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る

あぢの雨降るあぢの雨降る


~~~~~

世

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~





見たり人色傷き一ふりまゝに  
とちりり花も散るなりと  
作

枯柳とくちりり水

古年のちりり柳のふり  
とちりり花も散るなりと  
作  
とちりり花も散るなりと  
作  
とちりり花も散るなりと  
作

藩をたぐりりあきり  
とちりり花も散るなりと  
作

未田

○ 柳のちりり花も散るなりと  
とちりり花も散るなりと  
作

母にすゝめぬやとていふはなほいふに言ひて候得る御事  
速に紙巻を御覧なす其にいと候得る御事候へども  
候へども候へども候へども候へども候へども候へども

